

— 純粹持続が美として姿をかいま見せる時の時がある —

能と、＜純粹持続＞の美



— Visual...koike original. □面：當麻寺・中將姫 肖像を素材に、モーフィング □天冠飾り：光明皇后 不空羂索観音冠をマージ

□天冠紋中央：卑弥呼 神鏡より画像処理 □能装束：本阿弥光悦・俵屋宗達図をマージ

□Vision主題：三島由紀夫「中世」終章のイメージから、および批評文「能__その心に学ぶ」

□背景：複数の回遊庭園から湊合。

「（極度の美しさ）

その感動はどこから来るのだろうか？

現実の苔寺の池に、忽然として、わが歴史の永遠の女性が登場した、という奇跡的な印象を与えるからだ。

中世の能楽にあらわれた理想の女性像は、鎌倉以前の過去の世の、

半ば幻と化した永遠の美女の姿である。

その美は、生身の俳優の顔では決して表現することができぬ。仮面のみが.....(略)もし能舞台の約束や形式を離れて、この幻の女性像を、現代の現実の景色の中へ当てはめて見る時、その美しさにあなたは慄然とするだろう。

そしてあなた方自身もまた、いかに多くの、いつもの美に取り囲まれて生きているかを知るだろう」

三島由紀夫__「能__その心に学ぶ」

この世、つまりこの黄道十二宮で構成される惑星の架構の現実のただ中に、”純正の古代”の美、が顕われる時がある。

それは この次元では視えないもの <純粹持続>が

時空ゲート（橋掛り）をとおって顕現したということだ。

それゆえに仮面をつけた抽象的なイメージとしてしか顕れえない。

私たちは、文明は、

「みんなあの金色の中將姫の周りを回っていただけなのだ」

__koike

「中將姫のあでやかな姿が、舞台を縦横に動き出す。それは歴史の泥中から咲き出た花の顔に見えた。人間の生死に関する思想が、これほど単純な純粋な形を取り得るとは。僕は、かういう形が、社会の進歩を黙殺し得た所以を突然合点した様に思った。」

。「僕は星が輝き、雪が消え去った夜道を歩いていた。何故、あの夢を破る様な笛の音や大鼓の音が、いつまでも耳に残流のであろうか。夢ははまきしく破られたのではあるまいか。白い袖が翻り、金色の冠がきらめき、中將姫は、未だ眼の前を舞っている様子であった。」
_____小林秀雄 「当麻」

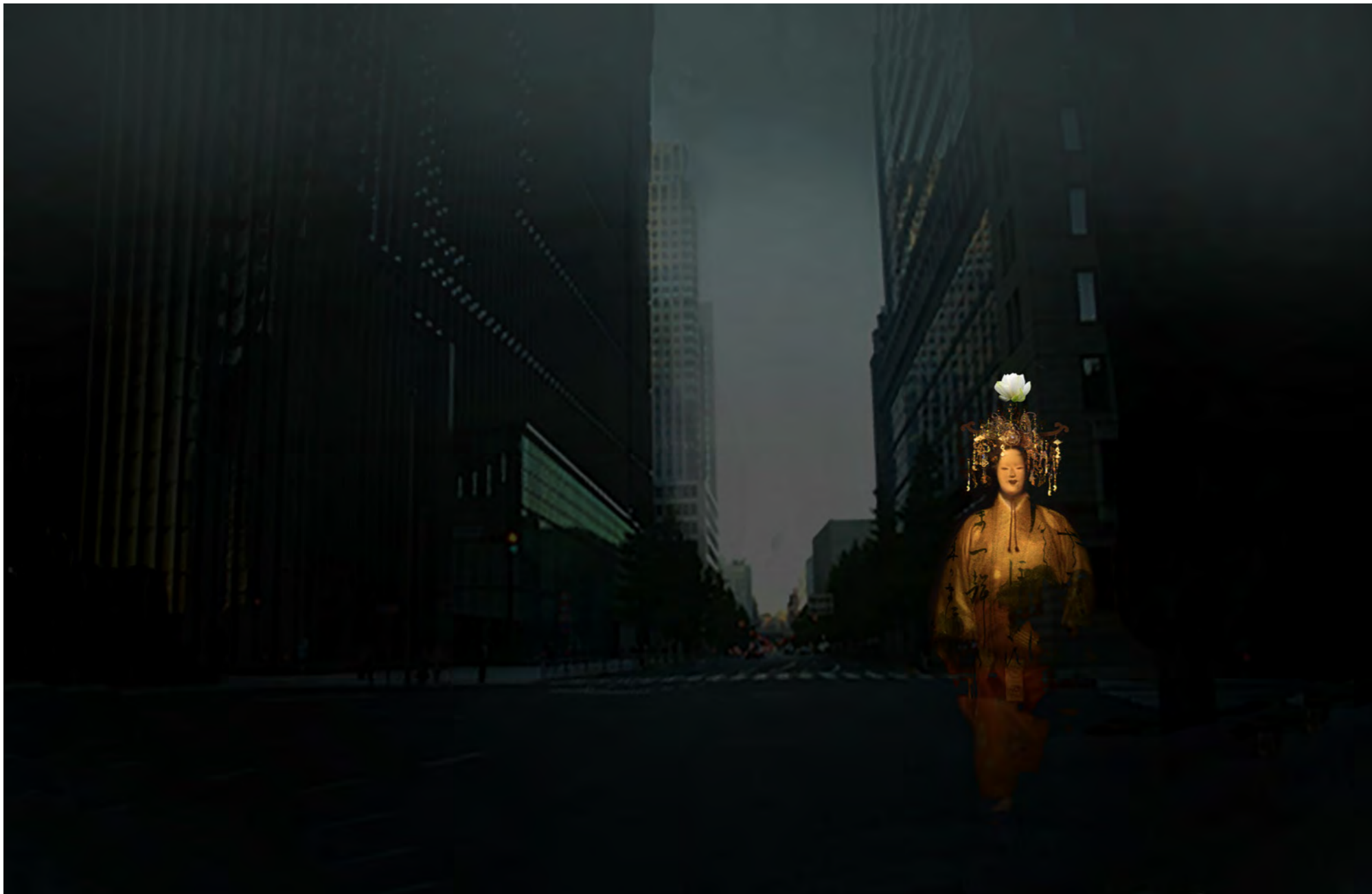
お能は、この世のただ中に、姿を見せる”純粹持続”

存在しないものの豪華の宇宙が純粹持続。

言葉の本質である空無。

(それは形而上学的素領域理論によれば、この世のどんな微細なモノのすぐ隣に満ち満ちている、海のような眼)

三島由紀夫の言うように、仮面をつけた「当麻」の金色の中將姫がこの世の中に お能として垣間見せる姿は、極度に美しい。。その姿はわたしには 視えないはずの双対の宇宙__”純粹持続”が、エーテルのようにビルの間につかの間、姿を顕わしたように見える。ニーチェは言う__世界は美的対象としてしか存在しない。



言葉の非在が、この世の時を垂直に切断し、純粹持続の宇宙に昇天させる

「中世文学では文学としての謡曲。
このアラベスク的文体の不思議に酔わない人は、
日本語の音楽的美感につんぼの人である。」

三島由紀夫「わが古典」より

月は程なく入汐の
花の外には松ばかり
はじめて伽藍、たちばなの

能の謡曲の言葉のアラベスクや、古代和歌・歌謡の言葉の繰り返しは

その本質が空無であるがゆえに、そこに絢爛を出現させてしまう。

とわたしは書いたのだが、繰り返し言葉については、注目すべき指摘に私は遭遇した。

「繰り返しの言葉によって時差が生まれ、それによりその時差の場所で飛翔し、上昇することができる」

「隠喩 (metaphor) の生まれる積算の場所 Ⅱ 時間の存在しない静寂・静謐の空間」 [註1]

*

神歌や古代歌謡、王朝和歌や謡曲の、言葉の繰り返しやクリシエのアラベスクから生まれるメタファーが、
線形的時間観念や、観念がつくったモノの配置のタテヨコ・幅の、夢遊のようなこの世界から、
一瞬、切断し、垂直にこの世を離脱するのである。豊饒の海の結末、時間の無い静謐の庭。

三島由紀夫が、古今や新古今の和歌原理主義を本質とするという意味がここあるだろう。

モノの裏側に反転する、言葉の意味は、垂直に自由を指す。この世にいながらにして。 koike

[註1]...岩田英哉「三島由紀夫の世界像2」web-siteの図よりテキスト抽出

*付記：三島由紀夫（平岡公威）は15歳の頃、学習院の古典の教師清水文雄に連れられて保田與重郎邸を訪ねた。

その時に三島は、保田に謡曲の文体はどうか？とだけ尋ねた。保田はありゃあ、百科事典見たいな文だ、とか言ったらしい。

たぶん、三島は、それ以降、保田を侮蔑したに違いない。三島由紀夫の空虚の形而上学は15歳くらいですでに完成されていたことに驚く。

政治的な見せかけで、日本浪漫派と三島由紀夫を結びつけてはならない。不思議なことに、幼少から三島には、ヘーゲルやブランショと同じ

空虚の形而上学が備わっていた。

— 純粋持続がこの世に、美として姿をかいま見せる時の時がある —

宇宙紀の花「当麻」

小林秀雄「当麻」



反転による量子宇宙<純粋持続>からの
この世（三次元Matrix）への、
<花>の流出。

金色の輪は、卑弥呼の神鏡の輪より採取。

幼な心の比喩 — 三島由紀夫「文化防衛論」より —
日本とは、<八咫の鏡の秘儀>。

”生命の樹”の

生命の樹の中心_ティファレット球=キリスト意識 指示書
本質である<美>への希求。

それは、<純粋持続>への

スターゲートであると同時に

durée pure _<奥行き>...半田広宣
<純粋持続>それ自体でもある。

小林秀雄なら、それを<歴史>や<思い出>と言った。

日本にとって

durée pure
<純粋持続>とは<花>である、

と言へる。

durée pure

小林秀雄の純粹持続は<反転>を本質としている

<もしも！ もしも、音の方に意識がある!!!とこう考えたらどうなんだ!!
逆に。ええっ?!! わたしや内側からそれを探ろうとしているにすぎない。>

小林秀雄「音楽談義」テープオリジナル音源より

音は海の方からやって来た。

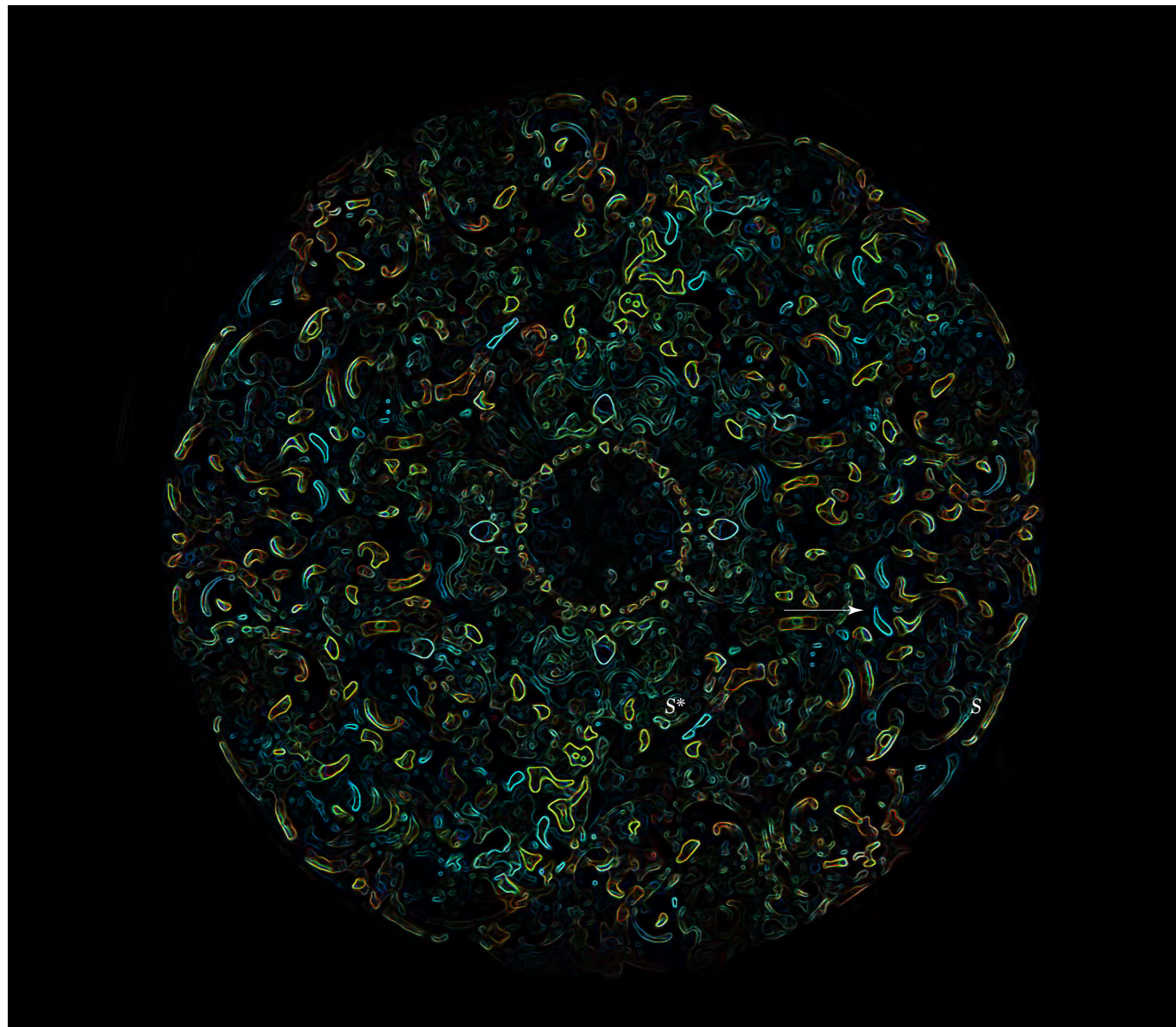
突然、感動が来た。
もはや音楽はレコードからやって来るのではなかった。

小林秀雄「モーツァルト」

小林秀雄が、鎌倉雪の下の中華料理屋で五味康祐と西欧古典音楽の主題で対談した音声記録テープが残っている。「音楽談義」。

小林は酩酊している。ステレオ針のSN比とか言ってる超・形而下の五味を相手に、小林は深淵極まりない形而上学を思わずもらしている。ほとんど怒鳴るように。つまり小林が音楽を聴くという経験は「自我」が、上から目線で偉そうに音を聴いているのではなく、逆に（外部の）音の方に意識がある、私はその内部からそれを探ろうとしているにすぎない、という敬虔な態度であるということを江戸前のべらんめえで怒鳴っている。美しいネルヴァルのような夜。テープは絶版。私は小林秀雄の親族である白洲信哉さんからそれをいただいたのだが、この箇所に出会って初めて「靈性」というものを考えるきっかけになった。新潮の記録では上記の、肝心な発言はすべて小林秀雄により抹消されているので知ることはできない。_ koike

私たちは眼があるにもかかわらず、
観ようとするものには、
稀にそれを視ることができる_____”^{durée pure}純粹持続”。
世阿弥の花は たしかに秘されている。 *koike.*



「絵を見るものの知覚は
画面の物質性を貫いて、
その背後にある
生命性まで達する」

小林秀雄 「感想」__ベルグソンに寄せて

「視ようとする画家の経験は
見るものと見られるものとの間の
緊張した関係が生じる。
この経験は汲み尽くせないものだ。」
__同上__

”わたし”と”あなた”が、流出・交差して

イエス・キリスト領域

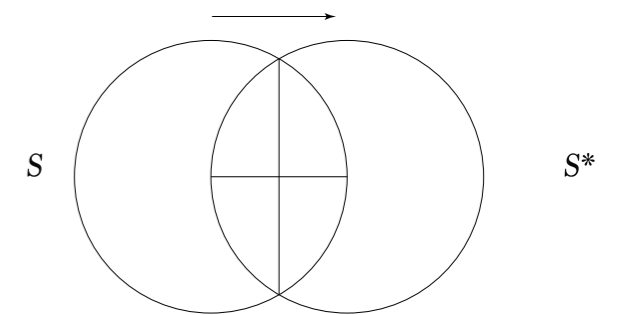
ヴェシカ・パイシス領域が出現する。

それは止揚されたわたしとあなた、

アントワヌ・ワトオのような雅の世界の出現。 *koike*



モーセ石板と同じ二枚の対の鏡・合わせ鏡



古今の和歌_言葉のプレシオジテ (優雅)

惑星を超え、黄道12宮を超え、「世界ならざるもの」、すなわち「世界の外」へ__大貫隆 グノーシスの神話



ギュスターヴ・モロー:
「ナイルに流されたモーセ」部分

三島邸・アンティノウス像
アンティノウスもまた、藤原定家か
ゾロアスターの嫡子か....

三島邸・日神を囲む黄道十二宮

[八咫の鏡]と同じ、八つの、「神人化へのエレメント」=
「生命の樹」のセフィラ

言葉_____<古今集>の言葉のイメージ、中性の空間。
インパーソナルな超空間。

言葉のプレシオジテが古今集の
水晶の城。

そこに「この世の現実」は
言葉のプレシオジテにより
”物質から反転”し、次元隔絶されている

「私は 今もう
古今集に帰ろうとしか思はない」

三島由紀夫、市ヶ谷自決の前の言葉

[言葉の空白の、死の、外の、自由]*¹

*1_参考:Blanchot モーリス・ブランショ

プロメテウスの自由。

古今和歌の言葉とは、インパーソナルな花。

「言葉とは、反転した物体」*²半田広宣「シリウス革命」

インパーソナルな花自体となった定家と
三島由紀夫。

つまり「反転した物体である言葉」に
なった三島由紀夫。

それはこの世で神を、神人を先取りした
明晰な文化意志だ。

「定家は、みずから神になろうとしたんだぜ」

— 三島由紀夫 —



この自邸の”静謐の庭”に置いたアポロ像（アンティノウス）と地上で取り巻く、黄道十二宮との矛盾に生涯、身を置いた三島由紀夫。三島由紀夫自身が”合わせ鏡”の像を意志的に生きた。とするとやはり彼は神の位相を得た。

「過去から未来へ流れる飴のような時間」という近代の青ざめた迷妄の隙間に身を置き、それを垂直に脱し、純粹持続の＜静謐の庭＞に至ること。

新古今の定家の喩とは何だろう？

この地上で、日本語により、＜非在を構築する＞ことにより、この地上のMatrix 黄道十二宮の只中で、未だ帰還しない、見えない宇宙を時間と幅が支配するこの世の隙間に、垂直に脱し、

(この＜垂直＞90°によって、あたかもこの三次元現実をフーリエ変換をしてしまうように)

「いかなる帰結も怖れずに、絶対の現在の中を胡蝶のように羽搏いている」宇宙の現前を実現すること。新しい神になること。それが死の直前に、三島由紀夫が友人に言った言葉、「定家は、みずから神になろうとしたんだぜ」の意味だろう。

もうひとりのわたし

〈非在の花によって世界の外をめざす〉
これが三島由紀夫の形而上学の方法だ。

無限遠点から鏡像のように
私を見ている本当の私がいる。

これは三島由紀夫で言えば、取り巻くこの三次元の
黄道十二宮の座標平面に
鉛筆のように立つアンティノウスの構図だ。
三島由紀夫はもう一人の自分がいる純粹持続の球体に
垂直にショートカットしたかったのだ。
ほんとうの私が地上の私を見ている天空の八咫の鏡。
合わせ鏡を脱する者。
見る者が同時に見られる者になる高次の[混融]は、
地上にいながらにして、反転の意識体になる新しい神。

三島由紀夫の、
肉体のレイヤーでは、[市ヶ谷での針が垂直を指す「正午」に意識的に設定した自刃も]、
言葉のレイヤーでは、[言葉の空虚という拠点に拠って空隙を切り拓き、90°で未知の荘厳された空虚に創造超出することも]、
〈垂直〉に黄道12宮を脱するというで全く「同じ」行為だった。
三島由紀夫は、死の計画三ヶ月前に、「私はもう、古今和歌に戻ろうとしか思わない」と言ったのはそのことだろう。
仏説の唯識なんぞよりも、本当の空虚=花 が 湿潤の情緒Jochoをもって、満たす”デュレ”（純粹持続）が
日本と、古今和歌の言葉の存在形式（来るべき世界普遍）にあると、やっと思ひ、
その非局所の宇宙に、言葉と肉体の次元を重ね合わせ、ショートカットを果たしたのだろう。_koike



花は<空>のぜんたい koike



あらゆる事物の一つ一つが
それぞれ無分節の全体を挙げての自己分節なのである。

「無」の全体が、そのまま花となり、鳥となる。

全体として覚知された「無」、すなはち無分節を一つの空円をもって

表すとすると、その空円に充満する全エネルギーが 分節の平面上に於いて、

a (花)となり、また b(鳥)となって現成する

という構造を表象することができよう

井筒敏彦「意識と本質」

<アルクトウルの段階> = みやび生命体

美であることが
そのまま
めざすべききたるべき
生命体のカタチであること
それが”みやび”



<シテエル島への船出>

Antoine Watteau _____ *L'embarquement pour Cythère*



_____ 海の向かふで 美が哭いている

たぶん 水平線の少し向かふで _____

三島由紀夫「豊饒の海__天人五衰」

_____ わたしたちは、この世と、言葉による”^{durée pure}純粹持続の宇宙”とが、
(古今集の空無を本質とした規範だけの宇宙は、純粹持続の相をしているだろう)
反転した双対並行性でしか存在しえないことに
意識的でなければならない。

カフカが諫めていたのは^{durée pure} <城>への到達の<本質的性急さ>だ。

言葉と言うブランショの死の空間の、抽象の位相を、

この世の尺度で誤解するのは本質的過誤なのだ。
M. Blanchot

だから眼は90°の角度で、「水平線の少し向かふで _____」

(この世をフーリエ変換の角度から)

(このあやかしの世を、ほんとうは平面であることが”絶対奥行き”の あらまほしきエチカの宇宙であることを知らせる視線の位置が)

この世の外から、こちらを覗いている。

koike

_____ まだまだ前夜だ..... _____ A. Rimbaud _____ Poesies - Une Saison en Enfer

八咫の鏡の中に生命の樹を視た日

ある日、生命の樹の図をぼんやり視ていたら、中枢にある黄金の”ティファレット”という球体(セフィロ)を取り囲む、八個の神的なエレメント球は、一つ一つがプリズムのような鏡となり、対向する球に光線を対角線に照射し、4対の”合わせ鏡”となる、それにより中枢のティファレット球を輝かせている構図に見えた。

そのとき、八咫の鏡とは、カバラ「生命の樹」の中心の八個の球体(種)で取り囲まれた部分を、八葉の鏡の中に圧縮した、宇宙進化デバイスであろうと思った。

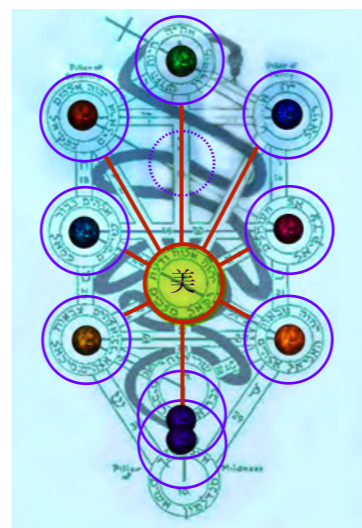
(その時、八咫の鏡は次元を超え、ダートを通して?、純粹持続非局所宇宙へのマカバとなるだろう)

人間を神人に向かわせようと降ろされた生命の樹の原理図の中心にある球体=“ティファレット”は<黄金太陽>であり、<イエスキリスト意識>であり、そして何よりもニンゲンを宇宙紀の為に<美>に赴かせる神聖アイコンである。

その進化デバイスとしての八咫の鏡を生命の樹の八個のエレメントを象嵌してこの神聖アイコンを私はdigital作業で左のオリジナルimageを作成した。

__ 八咫の鏡(=日本)と美と供犠の預言 __

美・太陽・キリスト意識に殉じた三島由紀夫はまさにこのティファレットの命のままに殉じたと言えよう。そして、カバラの書では、不吉にもティファレットの意味を、「美・太陽・キリスト意識」であり同時に、自身がそれらへの供犠となることを預言している。



生命の樹

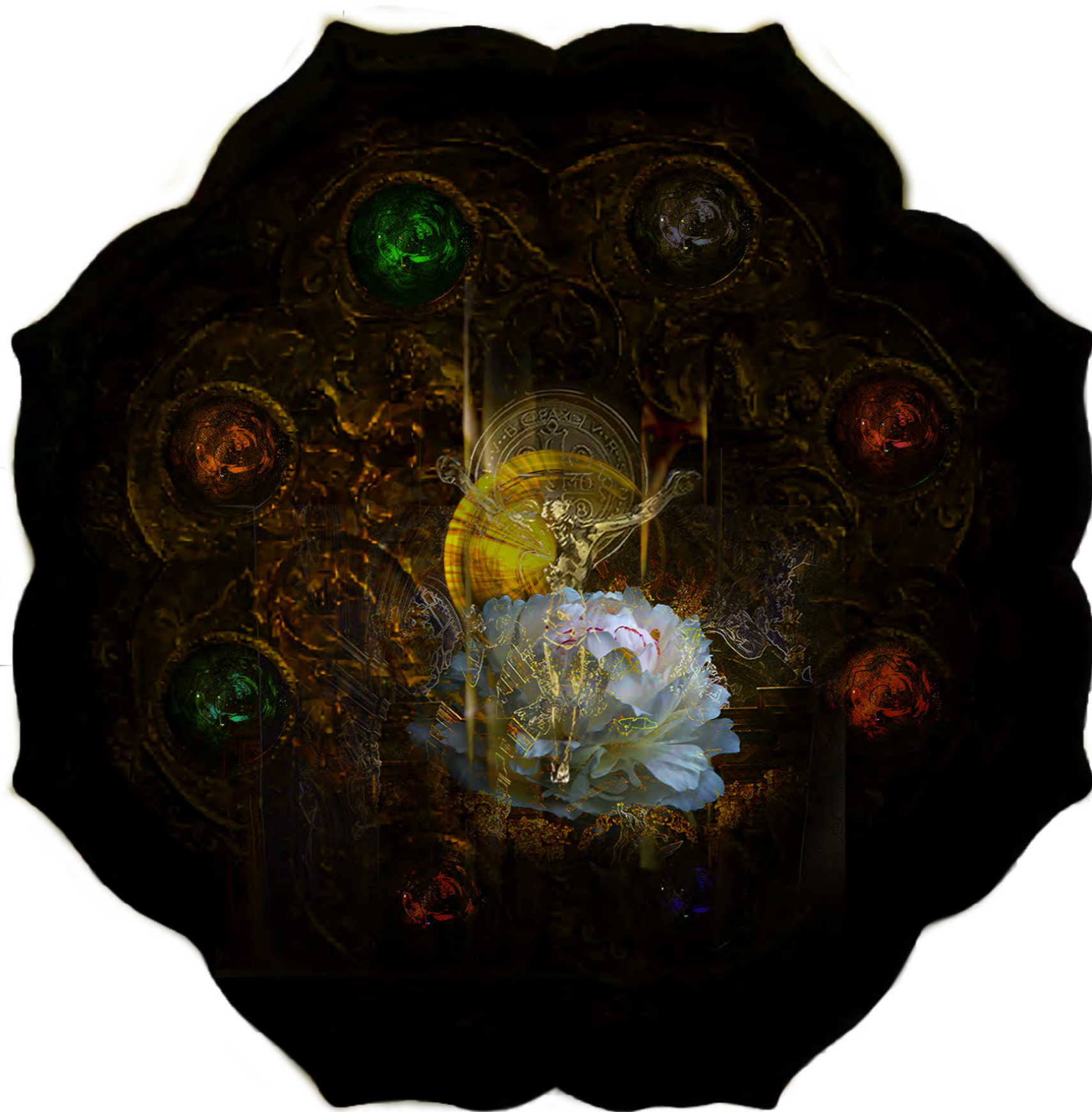


貼銀鍍金双獣双鳳紋八咫鏡



”生命の樹デバイス”としての八咫の鏡

全宇宙に浸透する美__宇宙紀の花__三島由紀夫



生命の樹の抽象である八咫の鏡の中心は”美”。 ニンゲンは、美の高次化により超人を目指す。
イエスキリスト

美の浸透。

誰もがゾロアスターだったかもしれない



イエス・キリストは
美を全宇宙に浸透させるために存在した宇宙精華だ。
それはゾロアスターが、そのみずからの本質を<莢>として
イエスキリストの個性はそのままに、アストラル体に、
挿入したゾロアスターの一人だ。
そのような方法で、時代や実体などを超えて、
聖なる任務を帯びた人格は、あらゆる時代に現れる。
このゾロアスターの多次元同時存在的な継承の方法は
ルドルフ・シュタイナーが 詳しく言及している。
ダヴィンチも、ニーチェも、三島由紀夫も、
時代を超えたゾロアスターの任務者だ。

八咫の鏡は、ゲート



八咫の鏡をゲートにして
量子宇宙が出現する

反転された世界
そこには時間も空間も
記憶も何も無い

死とともに精神の生がはじまる _____ヘーゲル

宇宙初発の二つの原円が重なる領域＝ヴェシカパイシスは有ではなくて＜不在の誕生＞。

宇宙は有りて在る実有。そこからの無の流出。

（素領域____有を潜勢している無言領域）

有が無を生んだのがヴェシカパイシス。

イエスキリスト領域。幾何学としてのイエス。

イエスキリストはゆえに＜不在の美＞。

創造の初発としての不在。

それは不在ゆえに世界を＜水晶の城＞として荘厳化してゆく。

その姿こそが神の姿＝生命の樹の願い。__koike

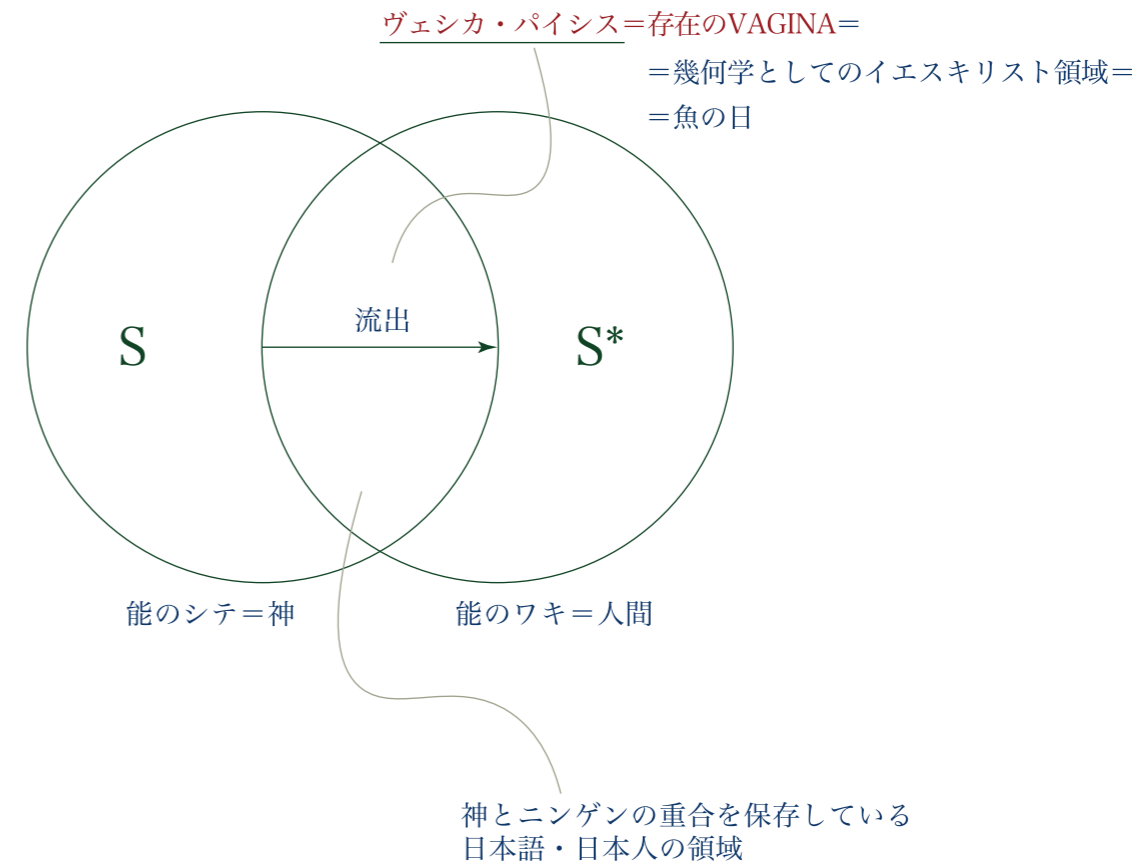
..... M.Blanchot

『「死とともに精神の生がはじまる」とヘーゲルは言う。

死が権能とするとき、人間が始まる。

存在があるためには 存在を欠如せねばならない。』

____モーリス・ブランショ「文学空間」より____

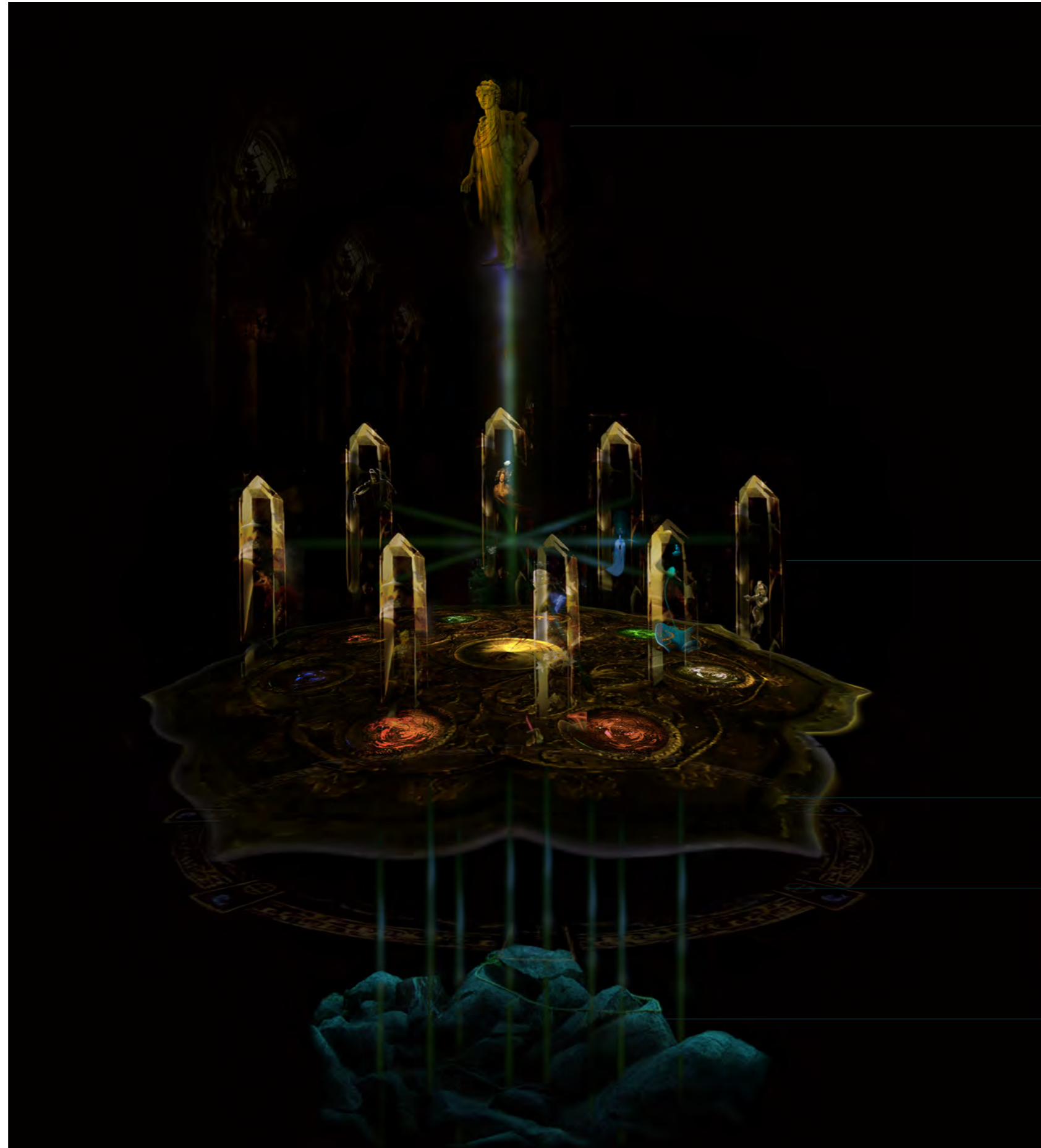


durée pure
磐座は純粹持続宇宙へのポータル。

磐座=八咫の鏡デバイス=次元転移の秘儀

<純粹持続の宇宙>_神々の故郷=未来の私たち

次元転移の門



アポロン・アンティノウス・

八咫の鏡に立つ、水晶の柱の神格__ (左後ろから)

- ・能__翁__天之御中主
- ・能__「当麻」・中将姫__阿弥陀如来
- ・日巫女__琴座の女王
- ・クリシュナ神
- ・ディオニュソス神
- ・ワトオの天使
- ・精霊天使
- ・飛天__音楽天使

磁場ポータル&マカバとしての
八咫の鏡

沖津鏡・辺津鏡

磁場ポータルとしての<磐座>
__三輪山 奥津磐座

美への祀り

みもろの

厳白禱がもと

白禱がもと

ゆゆしきかも

白禱原少女



古代日見女は、深い三輪山の神域の森、神聖な白い白禱（檜・櫃）の樹に吊るされた、オリハルコンの輝くアマテラスの神鏡の下で祀りを行っている。背景にはそのまま「生命の樹」の神聖図が八咫の鏡の図形にびったり重なり浮かび上がっているのが見える。この古事記・雄略天皇の歌に中西進はこう解説している。みもろという聖山、そのカシの木の下に一人の巫女の少女が立っている。重大な「由々しい」禱りをしていたのでないか？と。実は「万葉集」には解説不能の額田王の和歌がある、と。中西進は秘儀を隠すためにわざと読めない文字を当てたのだと語っている。

しかし、それを読み解いたある碩学がこう問題を記している。

「万葉集一の難訓歌 莫囂円隣之大相七兄爪謁氣

莫ミミカエル 囂ガブリエル 円ウリエル 隣ラファエル 七兄七七大天使……以下略。

西澤徹彦 watcheより

この厳白禱の樹は神の姿形であるカバラ「生命の樹」。まるで檜原カバラ。その中心に吊るされた八咫の鏡はアマテラスの鏡。その位置は生命の樹の聖図のティファレト（太陽・キリスト・美）の位置。この少女・日巫女は、イエスキリストを、つまり美を祀り呼び出そうとしている。金色の光を、

この祀りの三輪の杜の上空には、八咫の鏡と同じ形をした都市型母船が滞空してはすだ。たぶん幅100kmぐらいの。私の畏敬する琴座の女王・日巫女である人からは、先日も

「毎日、私を護るUFOと会話しています」と便りをいただいた。ハチらは60kmぐらいの大きさか。koike